

小鳥と兄妹

小川未明

青空文庫

町まちからはなれて、静しずかな村むらに、仲なかのいい兄き妹ようだいが住すんでいました。

兄あにを太郎たろうといい、妹いもうとを雪子ゆきこといいました。二人ふたりは、毎月まいげつ、町まちへくる新あたしい雑誌ざっしを買かつてきて、いつしよに読よむのをなよりの楽たのしみとしていました。

ある日ひのこと、二人ふたりは、雑誌ざっしを開ひらいて見みていますと、その月つきには、美うつくしい花はなや鳥とりの写しゃ真しんがたくさんに載のっていました。

「まあ、きれいだこと、兄にいさん、この鳥とりは、よく見みる鳥とりじゃありませんか。」と、雪子ゆきこはいいました。

その鳥とりは、すずめほどの大おおきさで、くびのまわりが紅あかく、まこ

とに美しかつたのであります。

「ああ、この鳥は、よく庭の木にやってくるうそという鳥だ。こちらにはたくさんいて珍しい鳥でないけれど、東 京 へゆくと、この鳥は少ないとみえて、たいせつに飼われるのだね。」と、兄はいつて、雑誌に書いてあることを妹に読んで聞かせたのです。

このとき、うそが、ちようど庭の木にきてとまっています。兄と妹が、雑誌を開いて、自分の写真を指さしながら、話をしてるのをじつとながめていました。鳥というものは耳ざいものでありますから、二人の話はなんでもよくわかりました。そして、目もよくききましたから、二人が、窓の下で見ている雑誌の絵もわかりました。

「いま、あの子供こどもさんたちがいつているのを聞くと、ほかの国くにへゆけば、自分じぶんは大事だいじにされるといふことであるが、いつたいどこだろう……。ああして、絵えにまで自分じぶんの姿すがたをかいて出してあるのを見れば、まんざらうそのことではない。」と、うそは思おもいました。

この小鳥ことりは、寒さむい、寒さむい、北きたの国くにに産うまれたのでした。もう夏なつもやがてくるので仲間なかまといつしよに、ふたたび故郷こきようへ帰かえる約やく束くをしたのであります。天気てんきのいい日ひを、見みはからって、彼らかれらは旅立たびだつことになっていました。

うそは、友ともだちとした約やく束くを忘わすれなかつたけれど、「どうか、自分じぶんをかわいがってくれる、その知しらない土地とちへいつ

てみたいものだ。」と思ひました。

彼は、木から飛びたつと、はるかあちらへ飛んでゆきました。

そして、街道にあつた、一本の電信柱にきて止まつたので

す。いつであつたか、電信柱が、なんでも自分に聞けば、こ

の世の中のことで、知らないものはないといった、そのことを思

い出したからでした。

青く晴れた、空の下で、電信柱は居眠りをしていました。

その頭の上にと止まると、小鳥は、黒いくちばしでコツ、コツとつ

ついて、彼の眠りをさました。

「ああ、眠いことだ。いい風が、そよそよと吹くので、ぐつすり

眠ってしまったが、俺を起こしたのは、何者だ？」と、電信

ばしら 柱は、不平をいわずには、いられなかつたのです。

「私わたしですよ。いつか、あなたから、おもしろい話はなしを聞きかせていた

だいたことのある、旅たびの小鳥こどりです。」

「ああ、そうでしたか。まだおまえさんたちは、北きたの国くにへ帰かえらな

いのですか。あの雲くもをごらんなさい。これからは、だんだん暑あつく

なります。そして、日に中ちゆうの旅たびが困こん難なんになりますよ。」と、

電でん信しん柱ばしらがいました。

「私わたしだけは、故郷こきやうへ帰かえらないと思おもうのです。それで、あなたに

お聞ききたいと思おもうのですが、どこかの国くにで、自分じぶんたちを大だい事じに

して飼かつて、もてなしてくれるところがあるということですが、

ほんとうでしょうか。」と、うそはたずねました。

すると、電信柱は、脊伸びをしながら、

「それは、ほんとうのことらしい。いつか、下の街道を通る旅人が、いろいろ小鳥の名をいって、金になるなどといったが、たしかその中におまえさんの名もあつたと思う。」と答えました。うそは、体じゆうが熱く、赤くなつたように感じました。

「電信柱さん、そこへはどうしてゆけるか、教えてください。」と、小鳥は頼んだ。

「さあ、なんというところか、場所さえわかれば、汽車に乗つてゆくとも、また、あちらの港からたつ汽船に乗つてゆくとも、また方法はいくらもあるが、その町の名は、私にもわかりません……。」と、電信柱はいいました。

あわれな小鳥は、そこから飛び立つと、もう一度、あの兄と妹が雑誌を開いて話をしていて窓の前にあつた木にきて止まりました。そして、自分たちをかわいがつてくれる町の名を知りたいとおも思いました。しかしきけると、その窓は、閉まつて、仲のいい兄と妹の姿は見えなかつたのです。うそは、いい声を出して鳴きました。けれど、ついに窓の障子は開きませんでした。

うそは、このとき、はかない希望を捨て、みんなといっしょに故郷へ旅立つことを決心しました。そして、青い空を、あちらに駆けて、自分を待っている友だちのいる方へ去つたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

※表題は底本では、「小鳥《こどり》と兄妹《きょうだい》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年2月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

小鳥と兄妹

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>